

● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●

入選

久保木 裕花(くぼき ゆうか) 第六中 2年生

作品名：「武士道とは」

図 書：武士道セブンティーン

私が最近読んだ中で、一番心に残った本は畠田哲也著の「武士道セブンティーン」です。この本は高校生の女子剣道を題材にした「武士道」シリーズの第二作目です。

この物語の内容を簡単に説明します。まず、主人公の磯山香織は東松学園高校に通う女子剣道部の二年生。頑固者で、自分にも周りにも厳しいところがある男まさりな性格です。そしてもう一人の主人公、甲本早苗はのんびりとした性格で、家の事情により、東松学園高校から、剣道の強豪校、福岡南高校へ転校します。この早苗が転校したことでの、物語は大きく動きます。性格がまるで真逆ともいえるこの二人の主人公が、はなればなれになってしまった新しい環境の中で、それぞれ自分の武士道について思い悩み、成長していく姿がとてもリアルに書かれています。特に早苗は転校先で黒岩レナという人物に出会います。自分のやりたい剣道と、レナ率いる福岡南の高度競技化を目指す剣道は、何か違う・・・そんな自分の思いに、早苗はずっと悩ませ続けられます。早苗は、ときには周りの人に相談しながら、少しずつ、その答えを見つけていきます。そんな感じで、物語は進んでいきます・・・。

私が一番心に残った場面は、早苗がレナに決闘を申し込み、勝負をすることです。早苗は東松に帰るために、レナは勝つために早苗を東松に帰したくないという思いを持って勝負をします。二人の決闘が終わった後、一部始終をこっそりと見ていた福岡南の剣道部の顧問、吉野先生が言った言葉「剣道は、武道は、武士道は、相手の戦闘能力ば奪い、戦いを収める。そこが終止点たい。相手の命も、自分の命と等しい、たった一つの命・・・。さらにいえば、試合や稽古で相手をしてくれるのは敵ではなか。常に、同じ道ば歩む、同志たい。」この言葉に、私は大きく心を動かされました。この言葉の中には、日本人が大切にしてきた「武士道」という心が詰まっていると思ったからです。早苗は吉野先生のおかげで自分の探し求めていた「武士道」にたどり着いたことでしょう。

実は、私は幼稚園の頃から空手を習い続けているのですが、最近早苗と同じようなことを考えていました。都大会などの大きな場で必ず語られる空手

道のオリンピック化。スポーツとして認められるために、空手道は少しずつ変わりはじめています。スポーツとして世界中に広まり、盛んに行われるようになるのは大変嬉しいことです。しかし、本来の武道としての技や心が失われつつあることも確かです。そのことを思うと、とても悲しい気持ちになります。嬉しいけど、悲しい。私の心は今でも複雑な気持ちです。

でも、私はこの「武士道セブンティーン」に出会って気づいたことがあります。それは、私は私の信じた「武士道」という道を歩き続ければいいということ。周りに流されない、強い意志を持つこと。そして、この「武士道セブンティーン」を通して、多くの人が失われつつある「武士道」を心の中に抱き続けることを願います。

